対人援助職者の感情状態と関連する職業生活出来事に着目したうつ軽減の視点

職業生活出来事がポジティブ感情またはネガティブ感情を媒介してうつに与える影響の分析を通して

○森本寛訓¹・瀧川真也²・長田久雄³

(¹川崎医療短期大学・²川崎医療福祉大学・³桜美林大学)

キーワード：対人援助職者，職業生活出来事，うつ

The viewpoint of alleviating depression in human care service professionals focused on their work life events related to affective states

Hiromichi MORIMOTO¹, Shinya TAKIGAWA² and Hisao OSADA³

(¹Kawasaki College of Allied Health Professions, ²Kawasaki University of Medical Welfare, ³J.F.Oberlin University)

Key Words: human care service professionals, work life events, depression

目 的

対人援助サービスは対人援助職者の行為そのものである。ゆえに対人援助サービスの充実には対人援助職者自身の心理状態によって、その充実の程度が左右される。対人援助職者の心理状態を良好に維持することは、対人援助サービスの充実を図るためにも重要であるといえる。筆者らは現在まで対人援助職者のポジティブ、ネガティブ感情と関連するポジティブ、ネガティブ職業生活出来事(それぞれ PWLE(Positive Work Life Events), NWLE(Negative Work Life Events)とする)に着目し、研究を進めてきた(森本・神田・長田, 2011)。本研究ではポジティブ感情とネガティブ感情がうつ(depression)の構成要素であること(Watson & Kendall, 1989)をふまえ、PWLEはPAを媒介して、またNWLEはNAを媒介してうつに与える影響、すなわち媒介効果について分析し、うつを軽減する視点に関して考察した。

方 法

調査対象者 近畿・中国地方の医療・福祉施設従事していた3職種(対人援助職者(看護職員と介護職員および児童養護職員)929人)を対象とした。**調査期間と手続き** 2008年9月から10月にかけて質問紙法による調査を実施した。調査前には調査対象者が従事する医療・福祉施設の管理者に対し調査内容について説明を行い、同意を得た。**調査内容** PWLEとNWLEは森本他(2011)において作成した質問項目で測定した。PWLEとNWLEはそれぞれ“職員間の関係”と“職場での役割”の2下位尺度で構成される。うつは日本語版CES-D(島・鹿野・北村・浅井, 1985)で測定した。ポジティブ感情とネガティブ感情は日本語版PANAS(佐藤・安田, 2001)で測定した。**データの整理** PWLEとNWLEは下位尺度ごとに得られたデータを総計し、得点化した。日本語版CES-Dで得られたデータは島他(1985)に従って集計し、得点化した。日本語版PANASで得られたデータは各下位尺度で総計し、得点化した。それぞれの得点は“P1(PWLEの職員間の関係)”“P2(PWLEの職場での役割)”“N1(NWLEの職員間の関係)”“N2(NWLEの職場での役割)”“D(CES-D)”“PA(ポジティブ感情)”“NA(ネガティブ感情)”と命名した。

結 果

本研究ではPWLEとNWLEを予測変数、うつを応答変数、PAとNAを媒介変数とした。そこで媒介効果をBaron & Kenny(1986)を参考にして分析した。この分析は(a)から(e)の5段階で行われた。(a). P1, P2, N1, N2を予測変数、Dを応答変数とした一般線形モデル分析を行い、各予測変数の係数(a_{P1} , a_{P2} , a_{N1} , a_{N2})を確認した。(b). P1, P2, N1, N2を予測変数、PAを応答変数とした一般線形モデル分析を行い、P1とP2の係数(b_{P1} , b_{P2})を確認した。(c). P1, P2, N1, N2

を予測変数、NAを応答変数とした一般線形モデル分析を行い、N1とN2の係数(c_{N1} , c_{N2})を確認した。(d). P1, P2, N1, N2, PA, NAを予測変数、Dを応答変数とした一般線形モデル分析を行い、PAとNAの係数(d_{PA} , d_{NA})を確認した。ここで (a) (b) (c) (d)の一般線形モデル分析では予測変数および応答変数として用いる得点を事前にすべて標準化した。また今回は3職種の対人援助職者から得られたデータを分析するため職種ごとに切片と傾き(係数)が異なることも予測された。よってこの予測を考慮した一般線形モデルを設定し、データの分析を行った。(a)から(d)の分析の結果、確認した係数は全て統計的に有意であった。(e). 最後に (b) (c) (d)より媒介効果を表す係数の積、すなわち $b_{P1} \times d_{PA}$, $b_{P2} \times d_{PA}$, $c_{N1} \times d_{NA}$, $c_{N2} \times d_{NA}$ の95%信頼区間をPRODCLIN(Tofighi & MacKinnon, 2011)で求めた。結果は $b_{P1} \times d_{PA}[-0.116, -0.055]$, $b_{P2} \times d_{PA}[-0.119, -0.058]$, $c_{N1} \times d_{NA}[0.066, 0.139]$, $c_{N2} \times d_{NA}[0.165, 0.259]$ であった。以上よりPWLEとNWLEがそれぞれPAとNAを媒介してうつに影響を与える媒介効果は認められると判断した。

考 察

本研究ではPWLEがポジティブ感情を媒介して、またNWLEがネガティブ感情を媒介してうつに与える影響、すなわち媒介効果について分析を行った。うつは様々な心身症状からなるが、感情面の不調はその症状のひとつである。今回の研究では、うつの感情面が低ポジティブ感情と高ネガティブ感情で構成されること(Watson & Kendall, 1989)より、ポジティブ感情と正の相関関係にあるPWLEと、ネガティブ感情と正の相関関係にあるNWLEには、それぞれポジティブ感情とネガティブ感情を媒介してうつに影響を及ぼす、媒介効果があると考えた。分析の結果、PWLE体験はPAを媒介してうつを低減し、NWLE体験はNAを媒介してうつを増大させることが認められた。したがってPWLE体験を高める、またはNWLE体験を低めるという視点は、対人援助職者のうつ軽減について有効な示唆を与えてくれるものと思われる。

引用文献(主な論文のみ)

Baron, R. M., & Kenny, D. A. (1986). The moderator-mediator variable distinction in social psychology research: conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51(6), 1173-1182.

森本寛訓・神田有希恵・長田久雄(2011). 対人援助職者の感情状態と関連する職業生活出来事の検討 ヒューマン・ケア研究, 12, 35-51.

この研究は科研費(19730453)の助成を受けて行われた。